

いつも軽やかでいたいと思う。そしたら気持ちいい毎日だと思う。佐藤伸治みたいに「晴れた日は君をささうのさ。晴れた日は君を連れだすのさ。」というような文章を書きたいし、そういう世界に生きていきたい。そしたら素敵な人生だ。

だんだん大人になるごとにゆがみがきつくなっている。きれいな光景はもうないのだろうか？ 私を待っている未来の私は怪物なのか？ それとも今の心を少しはとどめているのだろうか？

晴れた日に自転車に乗って、どこまでもどこまでも行くみたいに人生は進んでいかないだろうか？ 甘い？ 現実逃避？ でもそうじゃなかったら、人生はつらすぎないだろうか？

私だって甘えているばかりじゃない。努力はしているつもりだ。なんとか現実と折り合いをつけつつ、毎日生きている。

人にはできるだけ親切であろうと気をつけている。できるだけお年寄に席は譲るし、疲れすぎていて譲る余裕がないときはそんな自分を恥じもする。しかも心から恥じるのだ。同じマンションの住人には見かけたことがない人でもあいさつをする。しかもあいさつを無視されたっていらつきもしない寛容さだ。職場では笑顔を絶やさない。別に無理やり笑顔を作っているわけじゃない。楽しく、できるだけ和やかにやりすぎたいという無意識からの強い要求が、自然と私を笑顔の人にしていった。そうしたらなぜだかみんなから信頼される人になっていた。

一体私は何なのだ？

私は何だ？ これはどういうことか？

私は人から信頼されたかったのか？

鏡を見て自分の顔を近づける。

なぜ私はこれほど自分のことが好きなんだろう。

いろんなものが降り積もって身動きできない。

捨てるべき時だ。

求めるばかりでは欲しいものは手に入らない。

何かをあきらめることが大切だ。

人が行き交う駅の構内で私はこれを考えている。

いつか何かがきれいで澄みわたっていた。

今でもときどき、その残像のようなものを感じることはできる。

特に気持ちよく晴れた日には。

何かができそうな予感。希望。その感覚は地面から頭をつきぬける電流みたいに体内を走り、私を麻痺させた。強烈な感覚だ。

私はその感覚を感じたい。その感覚から遠ざかりたくない。朝、窓を開けた瞬間に走る衝撃。

晴れてくれ。

私の人生よ、晴れよ！

いつも晴れていてほしい。雨の日はいやだ。なぜみんなの人生が毎日晴れの日じゃだめなんだろう。みんなが幸せであるべきなんだ。絶対。

私の恋人は歌を歌ってくれる。しかも私の大好きなフィッシュマンズの歌を歌ってくれる。別に「フィッシュマンズ歌って。」とかせがんでいるわけではなく、その歌は自然にフィッシュマンズだ。彼も私と出会う前からフィッシュマンズが好きだった。

(ちなみにフィッシュマンズは英語としてはおかしいらしい。フィッシュメン、もしくはフィッシュャーメン？ だいたいフィッシュマンズって漁師っていう意味なのか、魚男なのかよくわかんないけど。)

一年ほど前、何かの雑誌で世界中の村上春樹ファンにインタビューをするという企画があった。そこに台湾でカフェを経営している男の子が載っていた。服装のセンスとか日本のオシャレな子とすごく近くて、違う国の人に思えないことがまずカルチャーショックだった。すごく素敵な男の子で、驚いたことにその子はフィッシュマンズが大好きだと言っていた。

カフェにもフィッシュマンズのCDを飾っているということで写真が載っていて、そこにはたしかに見覚えのあるジャケットがあった。そのとき私は日本でレディオヘッドとかウィーザーとかが人気なように、台湾ではフィッシュマンズが人気なのかもしれない！と思い、妙に興奮した。ただのファン心理といえばそれまでだが、「宇宙・日本・世田谷」を台湾で聴いているなんて、なんかスゴい。いわばシカゴハウス・デトロイトテクノ・世田谷ダブみたいな感じになる。

それはそれとして、歌はいいものだ。

私は恋人に歌を歌ってもらうのが大好きだ。歌を歌ってもらうのも、たぶん「晴れた日の日曜日朝」的な体験。

歌っている方も楽しいらしく、どんどん歌ってくれるので、私はずっと耳を澄ませ

ている。ときどき一緒に歌ったりもするが何小節かだけ。私は歌詞が覚えられないので、それ以上は歌えない。ハミングも楽しいけれど、すぐに飽きてしまう。やっぱり歌は歌詞があつてこそだと思う。

布団の中でまどろんでいると歌が聴こえてくる気がする。誰が歌っているのだろう。誰か、きっと、私が好きな誰かが歌っているのだ。